

当施設における *Oligella urethralis* の分離状況

◎米山 順子¹⁾、平田 京子¹⁾、神代 英士¹⁾、東田 和子¹⁾
株式会社 エスアールエル 九州検査部 福岡検査課¹⁾

【はじめに】

Oligella urethralis は、泌尿器生殖器系の片利共生菌であり、*Moraxella* 属から移籍した好気性グラム陰性短桿菌である。免疫が低下した患者には、起炎菌となり得ることもあり、高齢者の尿路感染症からの分離頻度も増加している。また、ニューキノロン系抗菌薬に耐性を示すことも知られている。従来法では同定に至らなかったが、質量分析法導入によって同定可能となった *O. urethralis* について、今回分離例を解析したので報告する。

【方法】

検体を 5%羊血液寒天培地/BTB 乳糖加寒天培地（日本 BD）で 35°C、24 時間好気培養後、菌の発育を確認した。質量分析装置 MALDI Biotyper smart (BRUKER 社) を用いて同定を行った。2021 年 4 月から 2022 年 5 月の間に分離された *O. urethralis* を対象とし、検体別、患者の年齢、性別、同時分離菌のデータを後方視的に検討した。

【結果】

O. urethralis は、24 時間では微小集落であり、培養延

長によって小型集落となった。質量分析法による同定では、score value の中央値が 2.45 と高く、菌種レベルで一致した結果が得られた。期間中に分離された菌は、尿検体 84 株、耳漏検体 7 株、褥瘡部膿検体 1 株の総計 94 株であった。そのうち、尿検体では、男性 12 株 (14.3%)、女性 72 株 (85.7%)、年齢の中央値は 87 歳であった。また、全分離例中、薬剤感受性試験を実施した 85 株では、レボフロキサシン耐性は 94.0%に及んだ。混合感染の割合は 95.7%であり、その菌種は多岐にわたった。

【考察】

片利共生菌の特徴通り、*O. urethralis* は様々な菌と同時に検出された。当施設では、高齢女性のカテーテル尿からの分離頻度が最も高く、耳漏、褥瘡部膿からも検出された。尿路感染症の起炎菌としては、過小評価されているが、ニューキノロン系抗菌薬に耐性傾向であることから、注視する菌種と考える。正確な菌種同定により、抗菌薬適正使用に貢献することが重要である。

連絡先 050-2000-4854